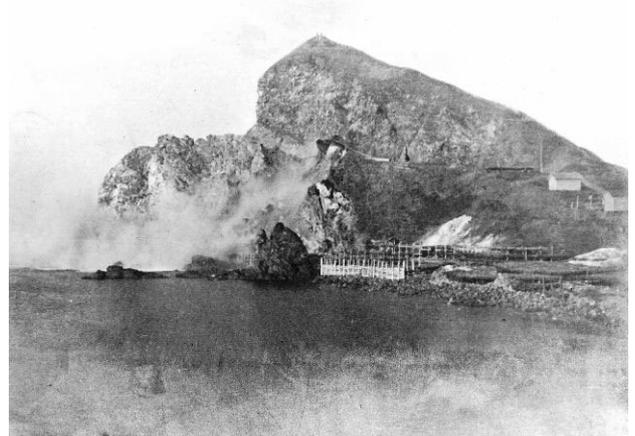




稚内フェリーターミナルの対岸にある北防波堤ドーム。一際目を引くこの建造物は、北海道大学を卒業し、北海道庁技師として稚内築港事務所に赴任してきた土谷実氏（当時26歳）が設計したものです。北埠頭が旧樺太航路の発着場として使われていた当時、ここに通じる道路や鉄道へ波の飛沫がかかるのを防ぐ目的で、昭和6年から11年にかけて建設された防波堤です。樺太へと渡る人々でにぎわったころのシンボルでもあり、古代ローマ建築を思わせる太い円柱となだらかな曲線を描いた回廊は、世界でも類のない建築物として内外の注目をあびています。

半世紀をへて老朽化が著しかったため、昭和53～55年にかけて全面改修工事が行われ、往時の姿によみがえりました。高さ13.6m、柱の内側から壁までが8m、総延長427m、柱の総数70本、半アーチ式の構造形式です。2001年には、北海道遺産に指定されています。

北防波堤ドームの建設には、利尻産の石材が欠かせなかったようです。はじめは、湾内の波打ち際にあった玉石が使われていましたが、それが尽きると、ペシ岬（灯台山）に目が向けられ、2つあった石山のうち小さな方の石山（モペシ）に目が向けられました。何年もかけてダイナマイトで破壊された石は、岬の裏からトンネル（今も残る歩道）を通過してトロッコで運ばれ、港からほんぶね盤船に積み込まれ汽船に曳かれて運ばれました。石材の多くは防波堤の基石に使われたようです。



【写真上】爆破されるモペシ（稚内市教委所蔵）

【写真下】石材を積み込む盤船



写真左のように、モペシとは、アイヌ語で「小さな崖」を表し、今残っているシペシは「大きな崖」という意味を持っています。

破壊されたモペシの跡地には、「山神」という小さな石碑が建てられていますが、誰がいつ何のために建てたものかは謎のままです。

